

「家畜福祉セミナー」メモ（2015年3月21日、「かでの2・7」で）

* 月形町の元酪農家・久保純一さん（1940年、旧美唄町生まれ）の話

・北海道に大量の牛が入ってきて 108 年くらいになる。明治 40 年に宇都宮仙太郎さんや町村敬貴さんが 25 頭くらい導入して始まった。これまでに、1 万頭近い牛が入ってきたのではないかと。7,616 系統群があり、うちの牧場で飼われたのは 10 系統くらい。そのうちの 2 系統は、100 年間にわたり、33 代くらいずっと系統繁殖した。なかには、全国共進会の最高位までいった牛もいる。私の親父は「系統が一番大事。その次に種牛。それを間違うなよ」と言っていた。それをずっと守ってきた。



・本当は酪農をやりたいがなかったが、家庭の事情で自分が残らなければならなくなった。（最後の牛を手放す）今年の 1 月までの 50 数年間、達成感のある牛との人生だったな、と思っている。

・アニマルウェルフェアの原点は、まず自分が幸せにならないと、牛にも幸せを与えられない。牛が快適に過ごす、という価値観だと思う。

・牛の行動レパートリーには、食餌行動をはじめ、休息行動、排せつ行動、身を守る行動、敵対行動、親和行動、遊戯行動、母子行動、運動行動、性行動、危機行動などがある。

・辞書を引くと、家畜とは「家で飼う動物」、福祉とは「幸せ」、ウェルフェアとは「幸福とか繁栄、福利、健康」とある。最近になって、「家畜の快適性に配慮した飼育管理」と理解できた。私は、牛洗いやブラッシング、爪切りなどを続けてきたが、何 10 年間もそれがアニマルウェルフェアになるとは考えてはいなかった。

・家畜福祉の問題は、動物の幸せを考えるなかから、私たちがどう生きるかを問い直す絶好の機会。牛も人間も、一生涯のなかで持っているものを最大限活用し、発揮して生命を終える。これが幸せの価値観であり、大事なことではないか。

・人間が何かを与えることによって、牛は必ず返してくれる。牛はごまかさない。そこに価値がある。産業動物の飼育方式や管理、輸送、屠殺、製品のルールづくりの要件などについて、倫理や感情を抱きながら、食用としての（家畜の）生命を考える必要があるのではないかと。

・食用のためだけでなく、牛たちを病気や汚染から生命を守り、生態系を守るために、仕事をするのが人間の役割ではないか。人間としての感性を取り戻し、視点を変えて牛を見つめ直してみたとき、初めて家畜との共存につながっていくのではないかと。

・地球上の生きものは 175 万種もあるが、開発行為や化学物質による汚染、地球環境の変化などによ

って、在来種が年間4万種も絶滅している。動物たちは、経済的にも労働的にも、食としても、心理・生理・社会的効果や治療的な効果をもたらしてくれている。家畜は単なる農畜産物ではなく、感受性のある生命存在であり、生産物を口にするときは、感謝の気持ちを持って、「生命をいただきます」と心に手を合わせてほしい。

・1992年に地球サミットが開かれ、生態系を守って種を保存することや、生物多様性の大切さを話し合った。しかし、道内では関係機関が進める乳牛の検定や検査などの影響もあり、生菌数や細胞数の基準がきびしくなって淘汰される牛が増え、2～3産で短い一生を終わる状態になってしまった。

・最近では、生乳不足のため、生乳の体細胞数の基準を緩くする、という動きもある。牛たちはたまったものではない。何かの加減や調整、誰かの儲けの力によって、酪農家や牛が淘汰されたりする。去年は、「1頭あたり2万円出すから牛の頭数を増やさない」という呼びかけもあった。どこかおかしく、構造的な問題があるのではないかな。

・人間が食べられない草などを、牛たちが乳や肉に換えてくださっている。草地酪農や放牧酪農、有機酪農を進めることで、飼料やエネルギーの自給を高めていくことが大事。明治時代に大冷害が何年も続き、食べるものもソバくらいしかできないなかで、農家は頑張った。道庁や民間の人たちが、「家畜を入れて土づくりをしなければ…」と考えた。それから100年たって、やっと北海道の農業生産物が余る時代になった。

・「穀物は輸入すればいい」というが、この12年ほどで配合飼料の価格が2倍近く値上がりした。それでも輸入し続けるのがいいのか。いつかは戦略物資になって、食料の分野で他国の言うことを聞かなければならなくなる。今、安倍首相が間違った方向に動いているが、原子力を進めた人たちが責任を取ってくれないと、この国は滅びてしまうのではないかな。動物たちすべてのことを考えないと、人間を滅ぼしていくことになる。

・オランダから牛が入ってきて、蘭牛協会→中央畜産会→帝国畜産会→中央農業会→戦時農業団全国農業会と変遷し、日本ホルスタイン協会ができて70年になる。登録をきちんとして戸籍を整備することが、人間でも牛でも大事なことだ。(写真は『はじめたくなる酪農の本』より転載。久保牧場の放牧風景)



・父は大正時代、「牛の登録をしなければ駄目だ」と主張し、雨竜郡で登録証を作っていた。どこの家にどんな牛がいて、どれだけ乳を搾っていて、何点か全部覚えていた。アメリカの牛の由来まで記憶していた。今は、そうしたことを語る人が少なくなり、全体の牛の能力が上がったので、系統や種牛のことをあまり言わなくなってきた。しかし、系統を守ることは100年かけて実現できるかどうかの事業だ。

・なぜ私が10頭くらいの牛を飼って

経営を続けられたのか。何か一つ収入を増やす方向に進もうと考え、例えば系統繁殖を進めて脂肪の高い牛をつくるために飼料を工夫した。

・家畜福祉は、動物たちにとっても、農家にとっても、経済的なメリットが出なければ前に進む必要はありません。大切なポイントとして、「人と動物が助け合う関係」、「人間にとって動物の役割」、「人間と動物の出会い」、「人と動物の付き合い」がある。動物たちは、人間のストレスを慰めてくれている。また、子どもの教育としつけ、生命の価値観も教えてくれているのではないか。動物の飼い主には責任と倫理、モチベーションと使命感が必要であり、飼った以上は最後まで責任を持ってほしい。

・毎日が当たり前のように過ぎていく日常生活は、その土地の風土と人々の思い、文化や伝統を育んでいる。その伝統の上に人々の生活が流れ、人生の考え方や知識、技術が受け継がれていく。お母さんが作ってくれたものを食べた体験が将来、必ず役立つときがやってくる。

・お母さんのおなかのなかで生を受け、やがて生まれ育ち、ついに生命を終える——この営みすべてが生きるということ。生命の尊厳に向かって、どんなに苦しくても、その目的を果たすまで生き抜くこと、これが人生ではないだろうか。



・一度きりの人生だから、自然を大切にし、生きている環境に感謝する気持ちを常に持ち、まわりの人たちに気を配り、生きがい的大事にして喜びを分かち合う。心のゆとりを持ち、決断したことは直接行動に表し、より多くの経験を積み重ねてチャレンジする勇気を持ち、人生を楽しんでいく。なんでもない言葉に心が動き、ふとした思いに心が熱くなることがある。何気ない発想が人を生かし、さりげない思いやりが人を癒すこともある。その一つひとつに表現がある。経験という心の下地をつくり、人生の質の向上に努めること。これが人生だ。

・私たちは、生命を守るために食を得ており、平均年齢まで生きると8万8千食、61tを食しながら人生を送らせてもらっている。食卓の安全や福祉、健康のなかから、まだ生きられる家畜たちが人間の人生と食事を守ってくださっている。

・今まで50数年間、私にとって、人生の達成感や体の支えとして、牛たちに勇気づけられてきた。牛たちから気心をいただいた。土づくり・草づくり・牛づくりを進め、環境資源を大事にしていく。ビジョンを持ち、家族とどんな暮らしをしたいのか、次世代に思いを寄せ、引き継いでいけるのか。また、安全・安心を提供し、地域社会を大切にして貢献していけるのか——。自分自身の存在価値と充実感を持って生き、魅力のある人生にしていく——。挑戦には限界がなく、未来は自分が創りだしていくもの。そんなことを若い人たちに託し、人にも牛にも生命をつなぐ人生を終われたらいいな、と思う。

* 末永龍太さん（1982年、札幌市生まれ）の話



・『おおかさん牛からのおくりもの』という本の絵を基に、乳牛の一生を紹介したい。富田美穂さんの作品で、酪農ヘルパーなだけに解剖学的にもリアルに描いてあり、この絵本を使わせていただいている。

・僕らも、難産で呼ばれて、必死に（子牛を）出して雌だったときは、雄よりも喜びが多い。子牛はしばらくすると立ち上がる。親の初乳が飲めるメリットの半面、病気をもらうこともあるので、母牛

から引き離すことが多い。

・1日2～3回の哺乳でどんどん育ち、1年たったあたりで人工授精を行なう。細長い棒の先に精液の入ったストローを込め、直腸から手を入れて陰部から通した、その棒を膣越しに触る。狭くなっている子宮の頸管部分に棒を通し、子宮のなかに精液を出す。牛の押さえ方がうまくいくと、人工授精も診療も上手にできる。乳牛は、子どもを産んで初めて乳が出る。牛は1年1産を目標に毎年のように子どもを産む。

・学生時代の6年間、搾乳のアルバイトを続けた。そこで初めて牛に触り、牛乳や牛肉がどういう経緯で食卓に上るのかなど身をもって体験。そうした意味では、消費者としての人生が長い。

・僕が初めてアルバイトをした牧場は、フリーストール牛舎だった。待機場所から牛を追い込む仕事から始めたが、牛に触れたこともなく、どうしたらいいのか焦った記憶がある。そこは、葛藤を与えてもらう場所だった。待機場所に牛を呼びに行き、立ってない牛がいる。最初は従業員に「何番立てません」と言うだけの仕事だった。でも、「立ってないってどういうことだろう？」と、だんだん考えるようになる。おしまいには、「何番死んでいます」と言うことも。これは何かおかしいんじゃないか、と考えさせられた。

・そこは400頭ほど搾乳するメガファーム。1日3回搾りで、1回目は朝3時半から始まる。ちょうど7時半くらいに全部の掃除が終わって学校に行けた。3回搾りなので授業がないときは昼も行った。

・牛は新人が来ると分かる。ベテランが来ると動くのに、僕が来ても動かない。人間をなめていて、わざとウンコをする。ミルクのつけ方も下手なのを牛が分かり、足を振ってくる。（牧場主は）きびしい親方で、「牛を動かすときも絶対に声を出すな。叩くな。手で押せ」と言われた。そのコツもだんだん分かってくる。別の牧場でもアルバイトをしたが、そこは竹を割ったようなもので牛をバンバン叩く。牛もすごく臆病で足も振る、と。いろんなところでバイトができ、いい経験になった。

・分娩してすぐ牛乳が出始める。すぐ来年には、子どもを産まなければいけない。分娩後2カ月ほどで、次のお産に向けて授精を始める。授精が遅れると、乳が出るタイミングが遅れて経済的にマイナスになる。60日過ぎて発情がこない、僕らは繁殖の治療を始める。

・300日ほど搾ってから、乾乳期には2カ月休むところが多い。このサイクルを回せる牛が減っている。どんどん大規模化して高泌乳で、平均2.3産くらいしかいかない。淘汰されて肉になるか、死んでしまう状況になる。

・高校まで札幌で過ごし、インコ以外の動物を飼ったことがなかった。大学の獣医学科に入って1年目、マウスの解剖の授業があった。動物を助けたいと思って入っている若者にとって、マウスを殺すことが苦痛であり、授業を放棄する人も。僕も「なんで殺さなくてはいけないんだ」と思った。

・でも、その授業ではマウスを殺した。頸椎脱臼させる前に、エーテルの入った瓶に入れて麻酔をかける。それでもかなりの抵抗があり、終わった後も皆、悶々と考え続ける。僕も実際にやって、正常な内臓の状態をきっちり覚えようとした。頭にきちんと焼き付けることが最低限礼儀だろう——と、自分のなかで言い訳をして、納得していくしかないな、と思った。

・大学4～6年は薬理学の研究室に入り、人間のアルツハイマーの研究をした。脳の記憶を司る海馬にアミロイドがどんどん出てきて記憶がおかしくなる。そのアミロイドを出させなくする方法はないのか——ということで、マウスの頭に穴を開けて細い管を海馬に直接薬剤を注入する。縫合して、その後の記憶力の試験のようなことをした。

・実験は、最後に動物を殺すところまでいく。安楽殺をして脳を出す。その脳でどんな反応が起きているかチェックする。厄介なのは、実験に雄しか使えないこと。雌と雄の両方でやると、「性別が違うから違う変化が出たのではないか」と論文で突っ込まれてしまう。どの論文も単一の性別を使っている。

・自分たちで繁殖をするが、雄と雌が産まれる。雌は、その時点で安楽殺する。卒業論文の最後に、「この実験で、どれだけ動物たちに対して意義のあることができたか分からない」と書いた。自分のなかで、ちゃんとした答えが持てなかった。ただ、一つ良かったのは、こうした世界を知れたこと。

・僕たちが利用しているもののなかには、すごく動物を犠牲にして作られているものがある。それを知った上で、使うか使わないことを選択できる。ただ、知らないでいることは良くないな、と思う。

・獣医になって6年、いろんなことが見えてきた。牛乳は、いろんな農家を集乳車で回った時点で一緒になり、乳業メーカーのタンクに納められる。乳質によって価格差は多少あるが、およその乳価は決まっている。単価が決まっているのだから、酪農家が収入を増やすためにどうしたらいいか——「生乳を搾るだけ収入は上がるでしょ」という考え方に行きがち。すると生産コストをいかに下げ、金をかけずに搾るか、という話になる。

・その結果、分娩後に「牛が立たない」とよく呼ばれる。カルシウム剤を点滴したりするが、間に合わず死んでしまうこともままある。急速に乳汁にカルシウムが移行して起こる病気が乳熱で、すべての病気の根源といわれている。倒れて死なないまでも、分娩後フラフラな状況で餌も食べられない。でも



乳は出てしまう。すると、牛は自分の体の体脂肪を使って乳を出し、どんどん痩せていく。また、乳熱やケトーシスの後には、よく第4胃変位になる。一気に飼料を食べられなくなり、ほとんど手術を行なう。僕らの診療所でも週に4～5頭は手術する。

・牛は草食動物。人間が食べられない草を食べて乳を出す目的で飼われていたが、泌乳量を増やすために穀類を多く与えるようになってきた。穀類を食べると第1胃で劇的な変化が起き、酸性になってしまう。すると、微生物たちが死んでしまったり、死んだ菌のなかから毒素が出てくる。おなかが酸性になったせいで脚にくるのはよく見られる光景。爪の先にくる。「ハイヒールの先に画鋸を入れて歩いているような感じになる」とたとえた獣医がいる。ロボット様歩行といって、爪先が付かないように歩く。

・僕らは、配合飼料を抑えたり、腹のなかをアルカリ性にするために重曹を飲ませたり、生菌剤を与えたりする。それだけ高泌乳になっている牛には多くのエネルギーを与えなければならない。

・もう一つ、乳量を伸ばすために大規模化する考え方がある。すごい頭数があると、落ちこぼれの牛が出てくる。アルバイトをしていて、400頭のなかで歩くのがすごく遅い牛、乳が渋くて時間がかかる牛がくると、「こいつが来ると遅くなるんだよな」となる。寝る間を惜しんで働く人たちなので、「生産性が落ちてきた牛は即肉だ」と考える。農家の視点でいえば、「それは悪だよ」と言えない現状がある。

・大規模化することで1頭ずつケアができず、1歳で種付けをして、2歳、3歳で子どもを産んで終わり、という状況が生まれてくる。牛を増やした結果、フリーストールのベッドの数よりも多く牛が入っている。順位の強い牛は寝ることができる。弱い牛はいつも歩いているし、そのまま廃用になるかもしれない状況が実際にある。飼料や電気代の高騰もあり、牛が消耗品のようにになっている。ただ、牛にやさしくやっている人はたくさんいる。

・そもそも、牛乳がこんなに安くていいのだろうか……。牛は、あんなに苦勞している。皆さんは、健康な牛からの牛乳を選びたくないですか？健康な牛を育てられる値段で買いたくないですか？こうした現状を知った上で、皆さんが選択できる牛乳が生まれているのであれば、買いたいと思いませんか？それは、結構な値段になると思うし、実現してほしい。この会の行き着く先の一つは、そういうことだろう、と思う。実現に向けて、僕はこの研究会を応援したいし、何か役に立てることがあったら使っていただきたい。

・札幌市内の小学校でやっている食育授業では、3択のクイズをよく出す。長い手袋を見せたり、子牛の骨折や下痢などの話も。「牛は何リットルの乳を出すか？」とも尋ねる。

・八雲にある日本ハムの屠場で取材し、写真もたくさん撮った。しかし、小学校側からは「子どもたちに見せるのはNG」と言われる。そこで、実際に屠畜している人の話をまとめた『いのちをいただく』という絵本を朗読する。すると、小学生が泣いてくれる。最後にアンケートを取ると、たいていの子は「生命に感謝して食べないといけない」と書いてくれる。たまには、「こんなを見ると食べられなくなる」という子もいるが、それも一つの感想でいいと思う。「牛乳やお肉は牛さんからもらった大事な生命でしょ。無駄にしてはいけないよね」と。そうして授業を終わります。